

## 樋口遺跡・西村遺跡（第2次）発掘調査報告

2020(令和2)年10月

三重県埋蔵文化財センター







## 例　　言

1. 本書は、令和元年度に実施した県営かんがい排水事業（斎宮第2地区）に伴う樋口遺跡及び西村遺跡の工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査地は、三重県多気郡明和町池村に所在する。
3. 本遺跡の工事立会は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。
4. 工事立会は、下記の体制で実施した。

立会担当	三重県埋蔵文化財センター	調査研究1課	主査	倉野雅文、研修員	山西隆治
立会期間	令和元年10月7日～11月6日				
立会面積	樋口遺跡	160m <sup>2</sup>	西村遺跡	33.5m <sup>2</sup>	
5. 西村遺跡については昭和57年にも発掘調査が実施されており、今回の工事立会調査を第2次調査とする。
6. 現地での図面・写真は倉野及び山西により、遺物写真撮影は当センター 主査 森川常厚が行った。なお、西村遺跡調査前上空写真は株式会社北村組の提供による。
7. 本書の作成は倉野及び森川が行い、編集は森川による。文責は目次及び文末に記載した。
8. 本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている。（令和2年4月1日三総合地第2号）。各遺跡調査区位置図に使用した図は三重県農林水産部の提供による。
9. 本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第VI座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。
10. 土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に掲った。
11. 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。



## 目 次

I.	前言	（倉野）	1
1.	調査に至る経緯		1
2.	調査の方法		1
3.	調査の経過		1
4.	文化財保護法にかかる法的措置		2
II.	位置と環境	（森川）	3
1.	地理的環境		3
2.	歴史的環境		3
III.	樋口遺跡	（倉野・森川）	5
1.	調査概要		5
2.	基本層序		5
3.	遺構		6
4.	遺物		6
IV.	西村遺跡	（倉野・森川）	18
1.	調査概要		18
2.	基本層序		18
3.	遺構		19
4.	遺物		19
V.	結語	（森川）	20
1.	樋口遺跡		20
2.	西村遺跡		21

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 遺跡地形図	5
第3図 横口遺跡調査区位置図	6
第4図 横口遺跡調査区平面図①	7
第5図 横口遺跡調査区平面図②	8
第6図 横口遺跡土層断面図①	9
第7図 横口遺跡土層断面図②	10
第8図 横口遺跡SD1出土遺物実測図	11
第9図 横口遺跡SD1、SK1出土遺物実測図	12
第10図 横口遺跡黒色砂質土層出土遺物実測図	13
第11図 横口遺跡各層位出土遺物実測図	14
第12図 西村遺跡調査区位置図	18
第13図 西村遺跡調査区平面図	18
第14図 西村遺跡土層断面図	19
第15図 西村遺跡屋敷地区画想定図	22

## 写真図版

写真図版1	調査前風景	写真図版5	119.7~128.5m
	0~10.7m		128.5~147.5m
	0~10.7m層序		147.5~160m
写真図版2	10~25m	写真図版6	土師器
	25~36m	写真図版7	鹿・土馬
	36~49m	写真図版8	灰釉陶器・山茶椀・土鍤・土馬
	49~62.5m	写真図版9	調査前風景
写真図版3	62~70m		調査前風景
	62~70m層序	写真図版10	0~15.5m
	70~86m		14.85~25m
	86~96m		25~35.5m
写真図版4	93~109m		21m層序
	109~119.7m		
	93~109m土師器椀出土状況		
	S D 2検出状況		

## 表目次

第1表 横口遺跡出土遺物観察表①	16
第2表 横口遺跡出土遺物観察表②	17

# I. 前 言

## 1. 調査に至る経緯

本書は、三重県農林水産部、伊勢農林水産事務所が実施した県営かんがい排水事業（斎宮第2地区）に伴う工事立会による埋蔵文化財調査報告書である。

当該事業の内、遺跡に該当する範囲について三重県埋蔵文化財センターが事業部局とその取扱いについて協議を行った。その結果、まず平成30年度に確認調査を実施し、遺跡の実態を把握することになった。調査は平成31年2月に樋口遺跡では17地点、西村遺跡では11地点で調査坑を設定して実施した。その結果、飛鳥時代を中心とする遺物が出土する範囲が明らかになった。

この結果をもとに、再度協議を行ったところ、保存が困難な範囲について、平成31（令和元）年度に工事立会を実施し、記録保存を行うことになった。

## 2. 調査の方法

### (1) 調査区の設定

調査区は、事前に確認調査で設定した調査坑を各基点として利用し、西村遺跡ではNo.7調査坑からの延長35.5mの数値を、樋口遺跡ではNo.8調査坑北端から延長160mの数値を設定した。そのため、従来のアルファベットと数字で組み合わせたグリッドは設定しなかった。

### (2) 挖削

表土等は重機で、検出面以下は人力による掘削を行った。なお、調査区が町道上であるため安全を考慮し、日々ごとに調査を区切って掘削及び記録作業、埋戻しまでを完了する工程を繰り返す手法で実施せざるを得なかった。

### (3) 記録

遺構実測は手測りにより実施し、1/40の土層断面図を作成した。遺構平面図については略測図を作成し、最終的に1/100の図面に集約した。

遺構写真に関して、調査区全景や個別遺構についてはニコンD3300を使用し、補助的にコンパクトデジタルカメラ(OLYMPUS)を使用し、記録写真撮影

を行った。遺物写真は、ニコンD800Eを使用した。

遺構図面、画像データ及び作業日誌等の記録類一式は、当センターで保管している。

## 3. 調査の経過

調査は令和元年10月7日から11月6日までの31日間である。以下に調査日誌(抄)を記す。

10月7日 西村遺跡の調査を開始。

調査区設定。調査区西端から延長15mを掘削及び調査。アスファルト、碎石につづき礫混じりの盛土及び岩碎。コンクリート板及び管が埋設。14m地点に消火栓があり、埋設による擾乱とみられる。遺構検出面を確認できず。図面記入、写真撮影後、埋戻し。

10月8日 延長25mまで掘削および調査。確認調査で検出したSK1を検出。さらに、SD1を検出。層位を確認する。1層：アスファルト、2層：碎石、3層：盛土、4層：明赤褐色粘土層を確認した。地山と見られる。図面記入、写真撮影後、埋戻し。

10月9日 延長35.5mまで掘削および調査。遺構・遺物は確認できず。図面記入、写真撮影後、埋戻し。午後より台風接近による木杭の固定等の作業を指示し行う。

10月10日 樋口遺跡の調査を開始。

調査区設定。調査区南端から延長10.7mを掘削および調査。アスファルト、碎石、造成土につづき、灰オリーブ粘質土層、暗オリーブ粘質土層、黒褐色・黒色粘土層が確認された。確認調査等の結果も踏まえ、灰オリーブ粘質土層直下を遺構検出面とした。図面記入、写真撮影後、埋戻し。

10月11日 延長25mまで掘削および調査。遺構は確認できず。遺物包含層より土師器、須恵器を検出。黒色粘土層の直下に灰色シルト層を確認。図面記入、写真撮影後、埋戻し。

- 接近する台風に対する安全対策を確認。
- 10月14日 体育の日（祝日）のため休工。
- 10月15日 延長36mまで掘削および調査。調査坑の湧水が激しくなる。土師器、須恵器、山茶椀、陶器を検出。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月16日 延長49mまで掘削および調査。これまで灰オリーブ粘質土までの層で遺物の包含が認められたが、さらにその下層である黒褐色粘質土層からも土師器が確認された。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月17日 延長62.5mまで掘削および調査。黒褐色粘質土層からの遺物が多く検出される。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月18日 雨天のため休工。
- 10月21日 延長70mまで掘削および調査。掘削中、降雨により予定の延長を縮小。黒褐色粘質土層より甌を検出。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月22日 即位礼正殿の儀（祝日）のため休工。
- 10月23日 延長86mまで掘削および調査。埋設管による擾乱を確認。黒色粘土層から遺物を検出。部分的に繩を多く含む灰色細砂層を確認。湧水が激しく、平面や土層確認が難解であった。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月24日 延長93mまで掘削および調査。降雨により予定の延長を縮小。灰オリーブ層直下に埋設管を確認。遺構SD1を検出。遺構埋土より土師器、須恵器等多数出土した。湧水が激しく平面や土層確認が難解であった。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 10月25日 雨天のため休工。
- 10月28日 延長109mまで掘削および調査。遺構SK1を検出。褐灰細粒砂の埋土中より、土師器、須恵器等の上器が多数出土。また、遺物包含層より土師器椀が完形で2点出土。最下層にこれまで見られなかった、にぶい黄色～明黄褐色粘土層が確認される。湧水は激しく、ポンプでの排水作業をしながら図面の記入を行う。写真撮影後、埋戻し。
- 10月29日 雨天のため休工。
- 10月30日 作業員の定期健康診断受診のため休工。
- 10月31日 延長119.7mまで掘削および調査。交差点付近の作業のため、掘削は北側から行う。埋設コンクリート管があり、擾乱部分が多い。遺構SD2を検出。また110.3m地点の黒色砂質土層より土馬が出土した。湧水は激しく、ポンプでの排水作業をしながら図面の記入を行う。写真撮影後、埋戻し。午後からは、工事施工業者の北村組による調査区のドローンでの写真撮影を行う。
- 11月1日 延長128.5mまで掘削および調査。用水路、埋設水道管による擾乱が顕著。遺物包含層より土馬が出土する。湧水が非常に激しく、ポンプでの排水作業をしながら図面の記入を行う。写真撮影後、埋戻し。
- 11月4日 振替休日（文化の日）のため休工。
- 11月5日 延長147.5mまで掘削および調査。造成による削平で造成土直下に地山とみられるにぶい黄橙色～浅黄色粘土層を確認した。図面記入、写真撮影後、埋戻し。
- 11月6日 調査最終日。延長160mまで掘削および調査。遺構SD3を検出。遺構埋土より土師器片が出土。図面記入、写真撮影後、埋戻し。現地での調査を終了した。

#### 4. 文化財保護法にかかる法的措置

事業にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、下記のとおりである。

○文化財保護法第94条に基づく県埋蔵文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育委員会教育長あて三重県知事通知）

・平成30年7月6日付け 効農第3182号

○文化財保護法第100条第2項「埋蔵文化財の発見・認定について」（松阪警察署長あて県教育委員会教育長通知）

・令和2年3月13日付け 教委第12-4421号

（倉野）

## II. 位置と環境

### 1. 地理的環境

樋口遺跡（1）及び西村遺跡（2）が所在する多気郡明和町池村は、丘陵地に分布する農村集落である。この丘陵は玉城丘陵と呼ばれる。巨視的には紀伊山地の一部で、その北東端を構成するものである。西南日本内帯の最南部に位置し、日本列島を東西に貫く中央構造線のすぐ北側である。このため、深層風化を受けた領家帶の花崗岩類で丘陵が構成され、丘頂部の定高性は不明瞭で無数の開析谷が発達する特徴を持つ<sup>1)</sup>。

当地の東西にも深い開析谷があり組んでおり、結果的に北側へ延びる尾根状を呈している。西村遺跡はこの尾根の先端部に、樋口遺跡は東側の裾野から谷底平野に位置している。尾根状ではあるが、その先端や裾の傾斜は非常に緩やかで、集落や畠地に利用されている。樋口遺跡は開析谷を、西村遺跡は北側に広がる明野台地を望み、この明野台地はさらに北側の沖積平野を経て伊勢湾へと続いている。両遺跡周辺の開析谷や明野台地は水田として利用されており、広大な田園地帯が遺跡前方に広がっている。

### 2. 歴史的環境

玉城丘陵は県内でも有数の群集墳密集地帯である。両遺跡の所在する尾根上には愛場古墳群（3）が、開析谷を挟んだ対岸には丸山古墳（4）、世古古墳群（5）、天王山古墳群（6）、カゴ山古墳群（7）があり、群集墳に囲まれていると言っても過言ではない。北西に1km離れた神前山古墳群（8）の神前山1号墳（9）は、昭和47年の発掘調査の結果、全長40mの造出を持つ帆立貝式前方後円墳であり、周囲を圧倒する規模であることが判明している。明治38年には画文帝神獸鏡の出土も伝えられ、倭王權との直接の関連が考察されている<sup>2)</sup>。古墳群は北方に広がる明野台地にも分布しており、織糸古墳群（10）、塚山古墳群（11）、史跡坂本古墳群（12）、明星古墳群（13）等、多数の群集墳が知られている。なかでも坂本1号墳（14）は、全長38mの前方後方墳で金

銅装頭椎大刀が副葬されていた。間接的ではあるが斎宮造営との関係が注目されている<sup>3)</sup>。

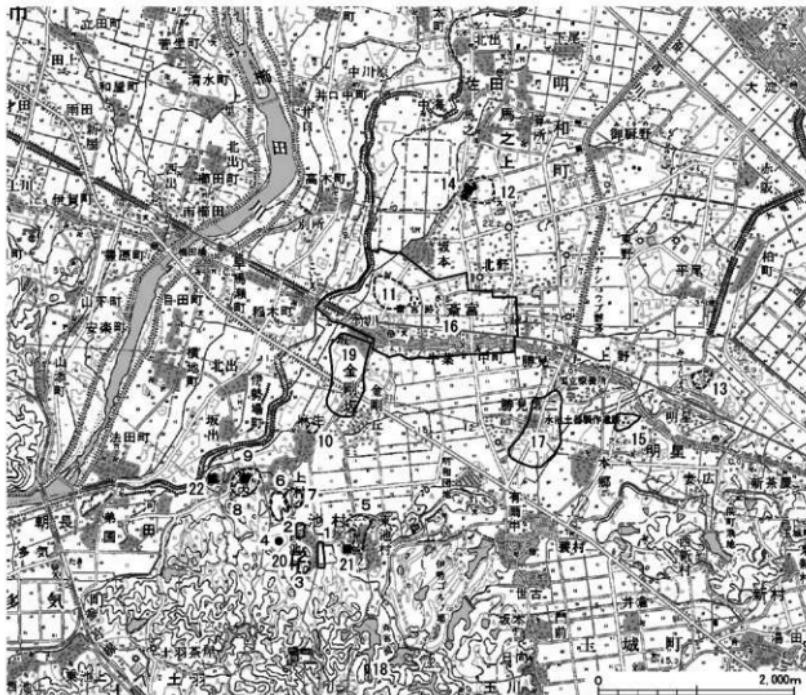
明野台地には有力な集落跡や官衙等も所在する。土師器焼成坑と工房等の状況が分かる史跡水池土器製作所跡（15）をはじめ明野台地では多数の土師器焼成坑跡が発掘されている。なかでも史跡斎宮跡（16）への土器供給地として注目される北野遺跡（17）からは、6世紀から8世紀までの200基以上の土師器焼成坑が検出されている。この北野遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけても大規模な集落である<sup>4)</sup>。斎宮跡は斎王の祭祀を司る特異な官衙として全国唯一のものである。斎宮との関連で言えば、樋口遺跡から谷底平野を遡ると平安時代の火葬墓が良好な状態で発掘された長谷町遺跡（18）がある。被葬者は火葬墓を営むことができる特定階層の若い女性とされる。当地が既述したように古墳時代には葬送地であったことを踏まえる<sup>5)</sup>と斎宮関係者の墓と想定したいところである。しかし、むしろ南側に開放する立地から神宮関係の荒木田氏も候補となる。東大寺莊園関係者等、被葬者候補は他にもあり、現時点では斎宮関係者はその候補に過ぎない。集落跡としては、縄文時代後期の環状壇や弥生時代の遠賀川式土器の出土で注目される金剛坂遺跡（19）では多数の発掘調査が行われており、縄文時代から奈良時代にかけての各時期において有力な遺構・遺物が検出されている<sup>6)</sup>。

中世集落としては不明なものが多いが、樋口遺跡から尾根の反対側に位置する愛場遺跡（20）や西村遺跡は昭和57年に発掘調査が行われている。掘立柱建物や井戸等で構成される集落跡が検出され、愛場遺跡では旧伊勢国で出土例の少ない瓦器碗が出土している<sup>7)</sup>。樋口遺跡正面の丘陵上には、北畠氏家臣の黒坂主計亮兵衛が城主とされる<sup>8)</sup>池村城址（21）が所在し、土塁等が良好に残存している。反対側の北西1kmには、北畠氏一族の居住のため岩内御所と称した<sup>9)</sup>岩内城址（22）もあり、北畠氏の影響が大きい土地柄と言える。

（森川）

[註]

- ① 目崎茂と・岩田修二「I 地形分類」『土地分類基本調査 松阪』三重県地域振興部地域振興課 1991
- ② 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告』明和町教育委員会 1973
- ③ 乾哲也『坂本古墳群発掘調査報告』三重県明和町 平成29年3月
- ④ 明和町教育委員会・三重県教育委員会『畜王宮跡－広域市町村圏道路調査－』1977
- ⑤ 上村安生ほか『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995.3
- ⑥ 小山憲一『長谷町遺跡』『長谷町遺跡・竜宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2010
- ⑦ 山沢義貴・谷本聰次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1971
- ⑧ 田村陽一ほか『金剛坂遺跡』『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985
- ・萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡（第4次）辰ノ口古墳群（第2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999.3 ほか
- ⑨ 高見宜雄『西村・愛揚遺跡』『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983.3
- ⑩ 三重県教育委員会『三重の中世城館』1976
- ⑪ 新人物往来社『日本城郭体系10 三重・奈良・和歌山』1980年



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」1:50,000より]

### III. 樋口遺跡

#### 1. 調査概要

樋口遺跡の調査は、幅約1.2m、延長160mの範囲で行った。地域の生活道路上であることに加え、住宅に面する調査箇所があるため、近隣住民への配慮を行い、既述したように一日の調査箇所はその日のうちに埋め戻す調査方法を実施した。そのため、十分に確認ができなかった部分もあったが、遺物を伴う土坑や溝が検出できた。特に黒色砂質土層から多量の遺物が出土し、7世紀のものとみられる土師器碗の完形が2点出土したほか、土馬が4個体出土している。

#### 2. 基本層序

調査区は標高21~22mの丘陵裾に位置する。南北に向かって緩やかに傾斜しており、調査区の南北端では約1mの比高差がある。

調査区全般にわたってアスファルト下には道路造成に伴う碎石等が70~80cmほど盛土されている。その下には近世の遺物を含む灰オリーブ粘質土(3)があるが、調査区南端から108m付近で消滅する。調査区南半では、その下に暗オリーブ粘質土(4)、黒褐色粘質土(6)があり、飛鳥時代の遺物を含むものの平安時代から中世までの多様な遺物も包含している。その下が黒色粘土(7)で、地表から1.2~1.4mの深さに位置する。さらに下方には灰色~暗青灰シルト層が分布し、湿地帯の様相を呈している。

108m以降の調査区北部では、近世の遺物を含む灰オリーブ粘質土や暗オリーブ粘質土、黒褐色粘質土は分布せず、厚い碎石の下は厚さ20~30cmの黒色砂質土(16)となる。この層は完形の土師器碗をはじめ飛鳥時代の遺物が多量に出土しているが、平安から中世の遺物も若干みられ、飛鳥時代の包含層と断定することには躊躇する。この層は、100~108m



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

間では飛鳥時代の遺物を含むものの平安時代から中世までの多様な遺物も包含するとした黒褐色粘土層の上位に位置し、それを裏付ける結果となっている。さらにその下は、無遺物の黄色系粘土層が出現し、南部の湿地帯とは異なる様相を見せる。調査区北端付近においては、黒色砂質土が途切れがちとなり、礫石の直下がこの無遺物の黄色系粘土の部分が多くなる。黄色系粘土の上面は地表下約90cm、標高は約20mである。

### 3. 遺構

#### (1) SK 1

96m付近で検出した。一部しか検出できなかつたが円形をなす土坑で、規模は長径約1m、深さ約0.1mである。湧水が激しく正確な規模を把握しきれなかつたが、埋土は褐色細粒砂の単層である。遺物は



第3図 桶口遺跡調査区位置図 (1 : 2,000)

土師器長胴甕の多数出土に加え、土師器椀や須恵器甕、土馬の小片が出土している。遺物からみれば飛鳥から奈良時代を中心とする6世紀後半から8世紀としたいところである。しかし、中世の陶器片を含む黒褐色粘土層(6)を切り込んでおり、中世以降とせざるを得ないが、詳細は後述する。

#### (2) SD 1

92m付近で検出した。規模は幅1.4m、深さは最深部で0.11mである。遺構埋土は黒色粗粒砂で単層である。南岸の傾斜が極めて緩やかで、湧水も激しいため自然流路の可能性が考えられる。遺物は、流路とするには土器の残りが良く、6世紀の須恵器片を若干含むものの口縁端部外面の面が鋭く丁寧に仕上げられた土師器甕や瓶等が多量に出土した。遺物からみればSK 1と同様に飛鳥時代を中心とする6世紀末～8世紀初頭としたいところである。SK 1より下層から切り込むものの、山茶椀を含む黒色粘土層を切り込んでおり、SK 1よりやや遅い鎌倉時代以降と考えざるを得ない。しかし、時期について疑問もあり、詳細は後述する。

#### (3) SD 2

113m付近で検出した。規模は幅1.2m、深さは0.3mである。調査区が狭小であるものの、南東から北西方向に直線的に続くものと推測される。遺構埋土は上下2層に分かれるが、両者ともシルトである。無遺物の暗褐色粘土層上面で検出したが、激しい湧水に見舞われた。遺物は、土師器甕の小片が多数出土した。小片からの判断ではあるが、7世紀を中心とする飛鳥時代の時期が与えられる。

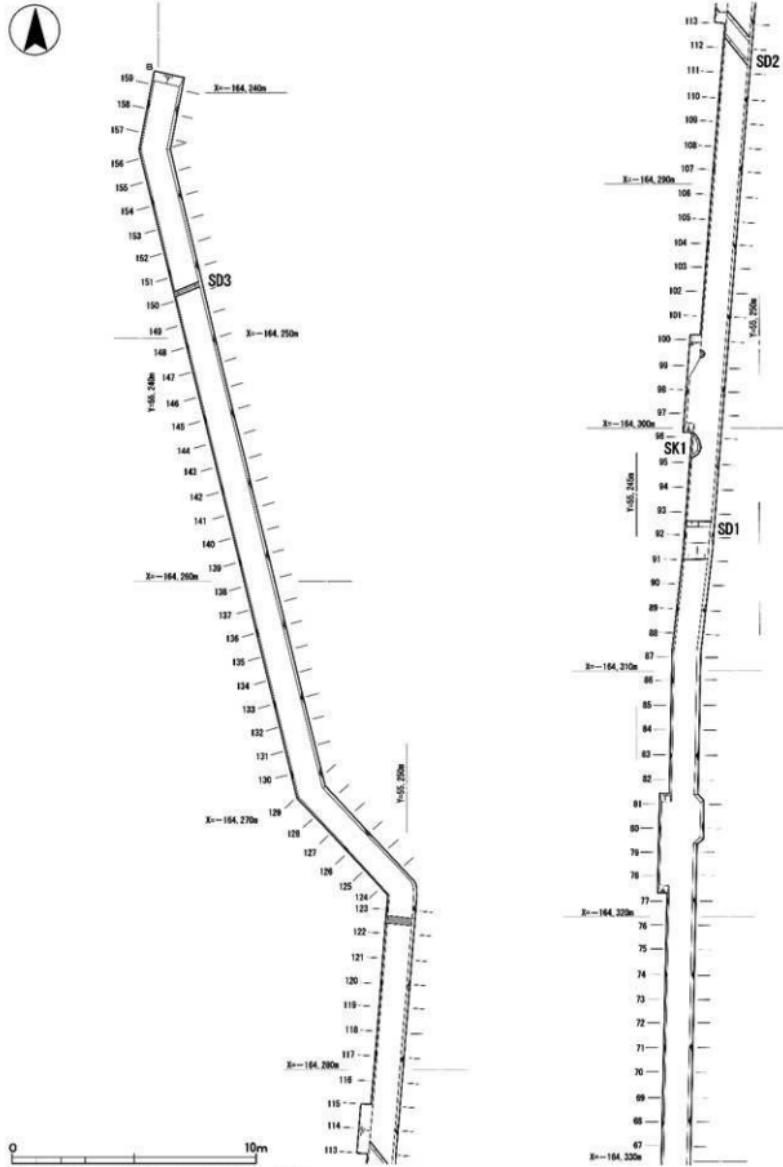
#### (4) SD 3

調査区北端近くの150m付近、浅黄色粘土層上面で検出した幅0.3m、深さ0.25mの小規模な溝である。埋土は黒褐色シルトの単層で、陶器片や土師器鍋片の小片が出土している。これらより、室町時代の遺構と考えられる。

### 4. 遺物

#### (1) SD 1出土遺物

土師器の椀、甕、瓶を中心に多くの遺物が出土している。7世紀から8世紀初頭のものを中心とするが、6世紀に遡るものや8世紀に降るものも混在す



第4図 捣口遺跡調査区平面図① (1 : 200)

る。しかしこの溝は、既述したように鎌倉時代の遺物を含む層を切り込んで掘削されており、これら全ては混入遺物とせざるを得ないことになる。

1～5は土師器の椀で、粗製のものである。4・5は外面の指頭圧痕が不明瞭なためナデとしたが、摩滅による結果かもしれない。4のみは、内のナデを工具で施す。

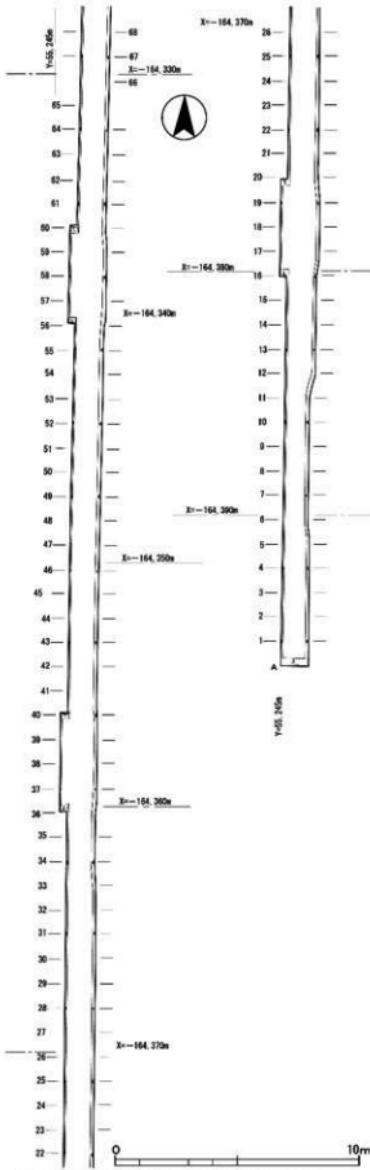
6は土師器の杯としたが、口縁部の形状や色調は粗製椀にちかい。調整を内外面とも工具ナデで行い、底部ちかくの外面もヘラケズリとするには及ばない。口唇部にヘラによる刻目を施す特異な形態でもある。

7は土師器の高杯、8・9は盞とした。7の脚柱はハケメで調整されるが、面取りを意識する様子はない。8・9は同一個体とするには色調等に違和感がある。しかし、9は8と同類のものの底部である可能性が高い。

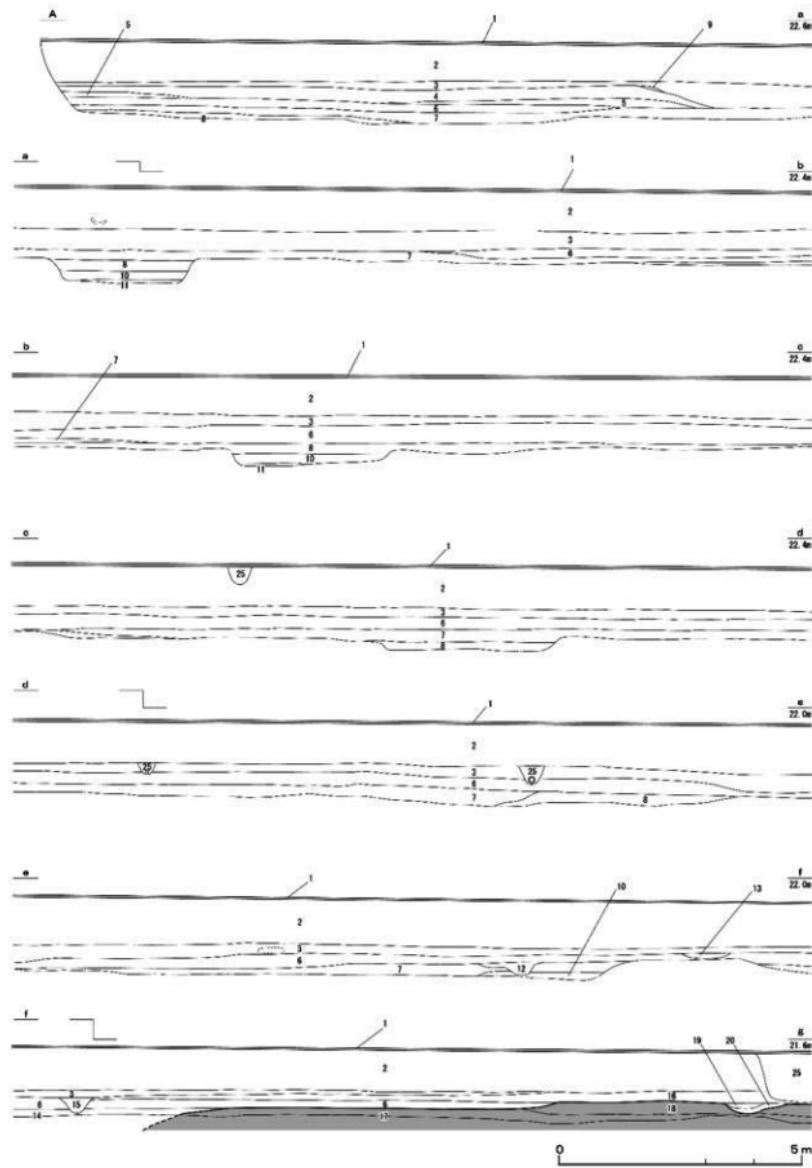
10～33は土師器の甕であるが、11を除き形態の全様が明確なものはない。おそらく、多くのものは長胴甕になるものと推測される。11はやや下彫れの形態を呈する小型の甕である。体部外面に沈線を2条巡らせている。内面の下半にヘラケズリを施すものが多い中で、ヘラケズリは体部最大径付近に止まり、底部内面はナデとなっている。27の内面もヘラケズリとするには弱く、工具によるナデとした。15・22等にみられるように、口縁下部が肥厚するものが多い。口縁端部の面は鋭利なもので、24のように板状の工具により強くヨコナデを行い成形していることが観察できるものもある。しかし、10のように緩慢な口縁部外面のもの、17のように沈線状になるものもある。棒状工具による結果と思われるが、これらの口縁端部外面の差異は、単に工具幅による結果であるのかも知れない。

34～40は土師器の瓶であるが、全体の形状が明確なものはない。当地域の同類の瓶は、内面下半をヘラケズリで調整するものが普遍的である<sup>⑤</sup>が、37はヘラケズリとするには弱く、40は底部まで横方向のハケメを施している。

41は土師器の甕の体部片と思われるものに穴をあけ、短い円筒状のものを挿入するかたちで接合したものである。密着を良くするためにハケメにより外を強くナデつけている。小片のため全体の形態は



第5図 桜口遺跡調査区平面図② (1:200)



第6図 捣口遺跡土層断面図① (1 : 100)

不明であるが、注口をもつ容器の体部片のようである。体部に注口をつけたものは森脇遺跡<sup>2</sup>等で、若干の出土例がある。注口形態等に差異はあるが、これらも醸造の用途に用いられるための容器と推測しておく。

#### (2) SK 1 出土遺物

土師器の椀、杯、皿、甕、須恵器、土馬等の多様な遺物が出土している。6世紀後半から8世紀のものと思われるが、既述したように中世の陶器を含む層を切り込んで掘削されており、現状では混入遺物とせざるを得ないものとなる。

45は土師器の粗製椀、46～49は土師器の杯、50は皿、51は高杯である。杯としたものの内、47はやや赤味を帯びた発色で、底部外面のヘラケズリや放射と螺旋の暗文を施す。しかし他のものは淡褐色系の発色で粗製椀の雰囲気をもつ。48は器壁が薄く、ナデで仕上げるもの、体部外面の上半にヘラケズリ

を施す特異な調整である。ただしこのヘラケズリは工具ナデとしても良いほどの弱いものである。

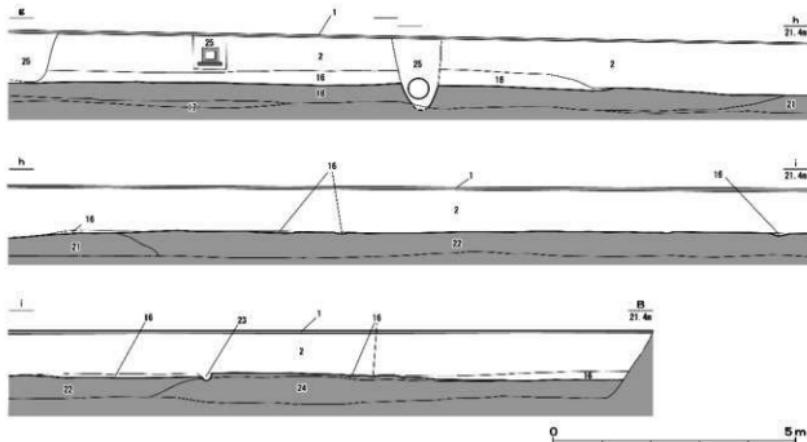
52は土師器の甕とした。器壁は甕類と比べると薄いものである。調整は、幅が広く谷が深いハケメ工具を用いている。外面は縦方向にハケメを施した後、横方向にナデ、内面は横方向にナデを行う。

53～60は土師器の甕である。53等のように口縁下部が肥厚するもの、54等のように端部外面に鋭利な面をもつものも散見される。56の頸部内面には、工具の角で押圧したような刻目が巡る。口縁部と体部の接合時の作用が残ったものかも知れない。

64は土馬の足と考えられる小片である。題(63)は、注口の上下に2本一組の沈線を巡らし、肩部と沈線間に刻目を施している。

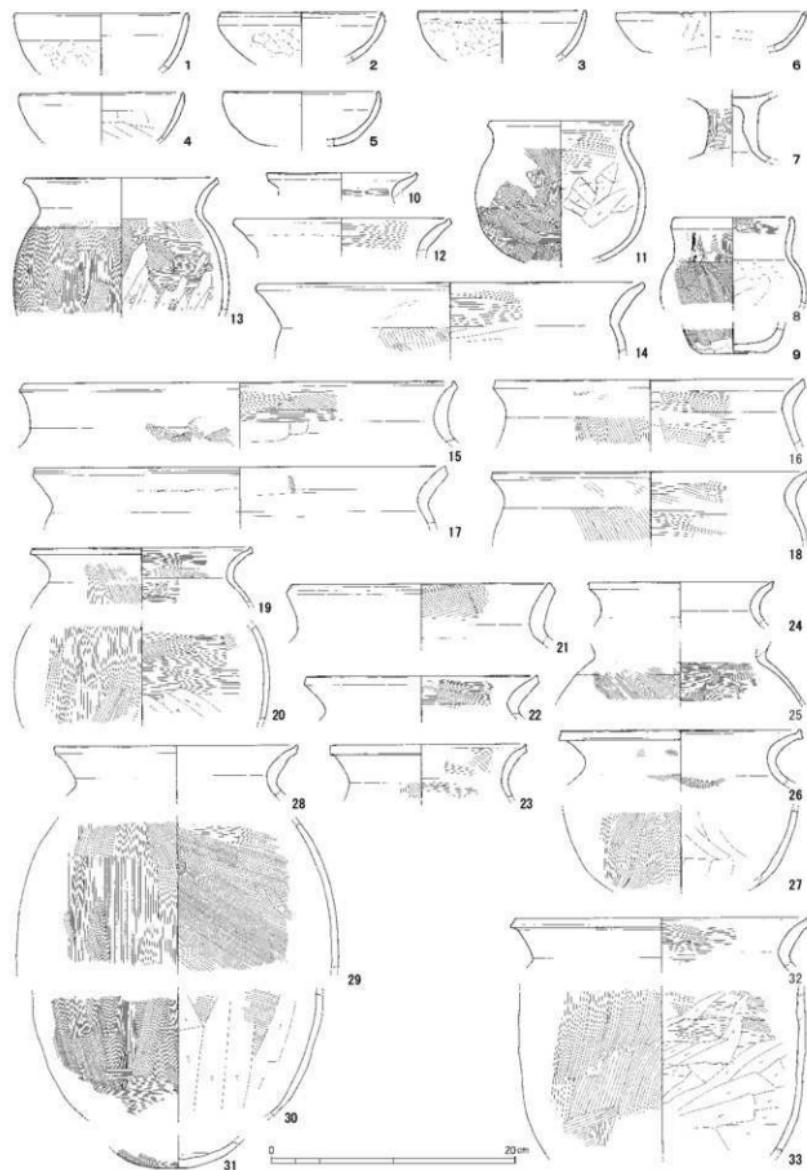
#### (3) 黒色砂質土層出土遺物

大半が土師器で、須恵器、灰釉陶器、施釉陶器等も散見される。なかでも土師器甕片が多量に出土し



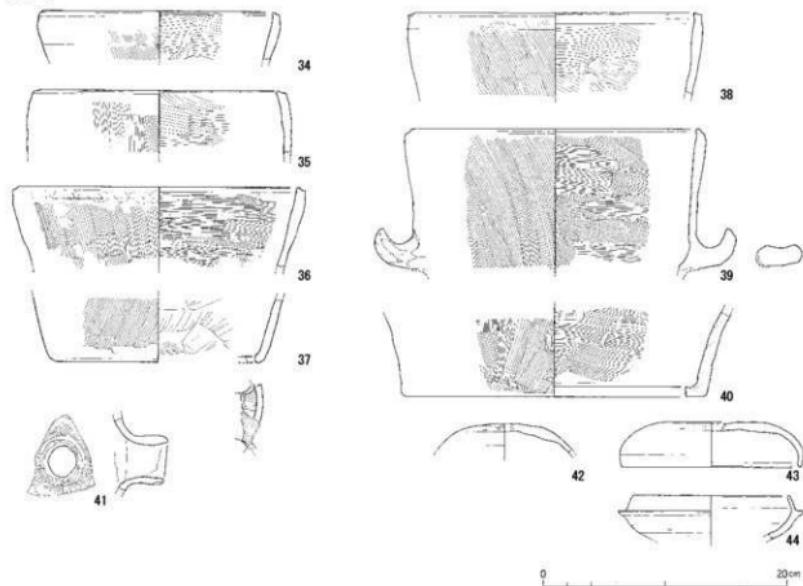
- |                     |                            |
|---------------------|----------------------------|
| 1. アスファルト           | 10. 7.5YR2/1 黒色粘土          |
| 2. 砂岩および造成土         | 11. 50A/1 白青シルト            |
| 3. 5Y4/2 喀オリーブ粘質土   | 12. 10Y2/1 黒色粗粒砂 (SD1埋土)   |
| 4. 7.5Y4/3 喀オリーブ粘質土 | 13. 10Y4/1 桐原細粒砂 (SK1埋土)   |
| 5. 5Y4/3 喀オリーブ粘土    | 14. 2.5Y6/4 にじみ黄色粘土        |
| 6. 2.5Y3/1 黑褐色粘土    | 15. 10Y2/1 黑色粘土 (P1埋土)     |
| 7. 2.5Y2/1 黑色粘土     | 16. 10Y2/1 黑色砂質土           |
| 8. M4/4 灰色シルト       | 17. 2.5Y6/8 明黄褐色粘土         |
| 9. 10YR3/3 喀褐色土     | 18. 10YR3/4 喀褐色粘土          |
|                     | 19. 10YR4/1 黄灰色シルト (SD2埋土) |
|                     | 20. 10YR2/1 黑色シルト (SD2埋土)  |
|                     | 21. 10YR6/4 にじみ黄褐色粘土       |
|                     | 22. 2.5Y7/4 黑褐色粘土          |
|                     | 23. 2.5Y3/1 黑褐色シルト (SD3埋土) |
|                     | 24. 10YR7/8 黄褐色粘土          |
|                     | 25. 混乱                     |

第7図 捣口遺跡土層断面図② (1:100)

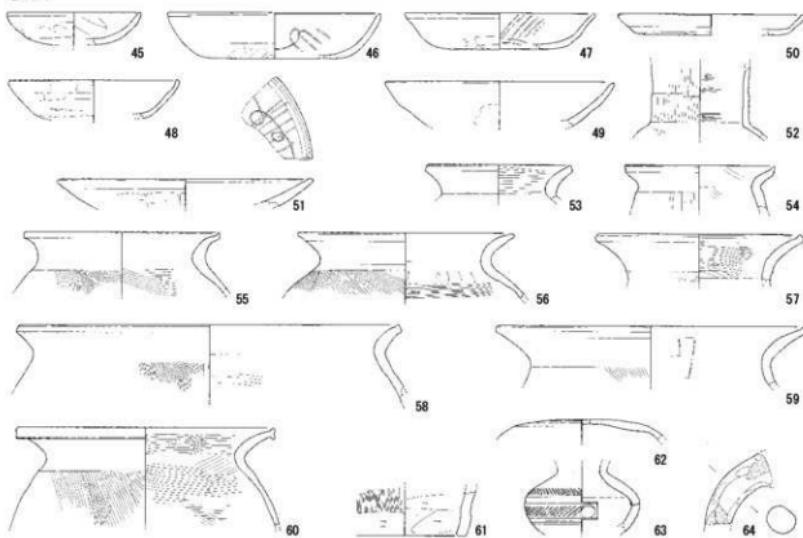


第8図 桶口遺跡SD 1出土遺物実測図 (1:4)

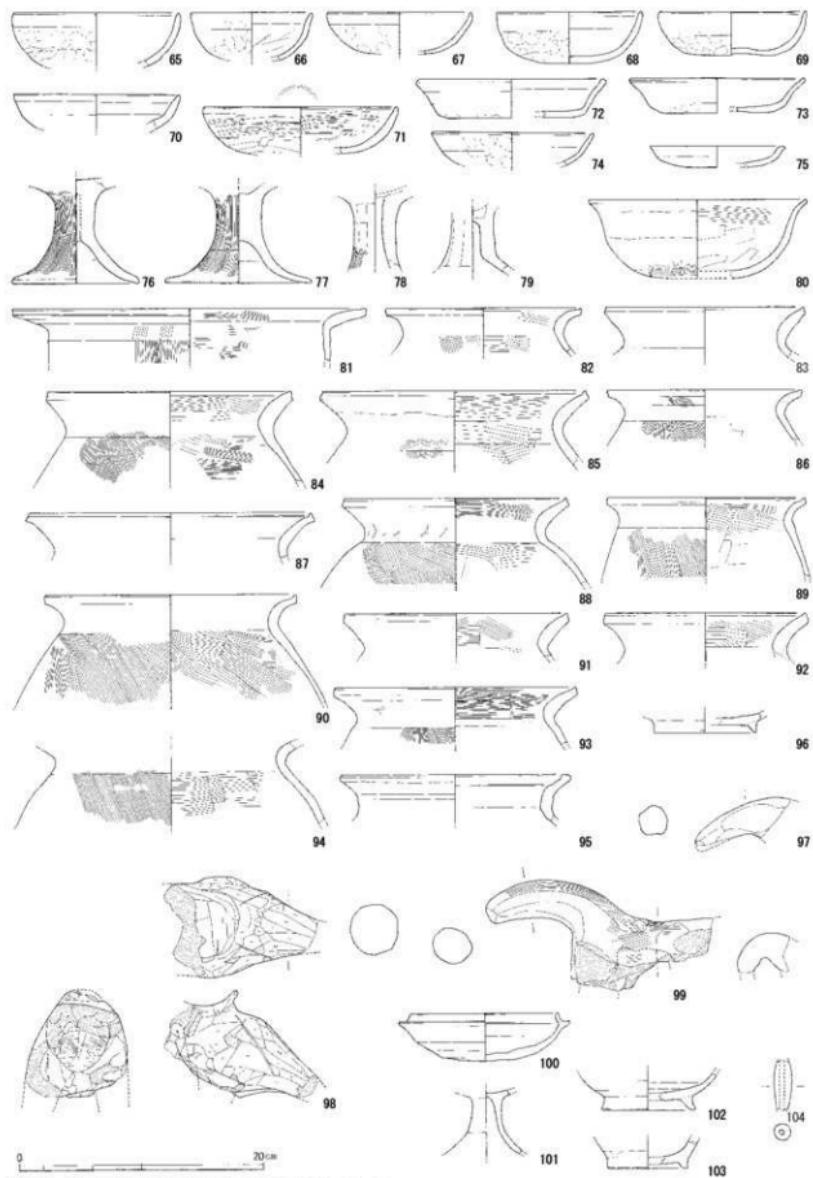
## SD 1



## SK 1

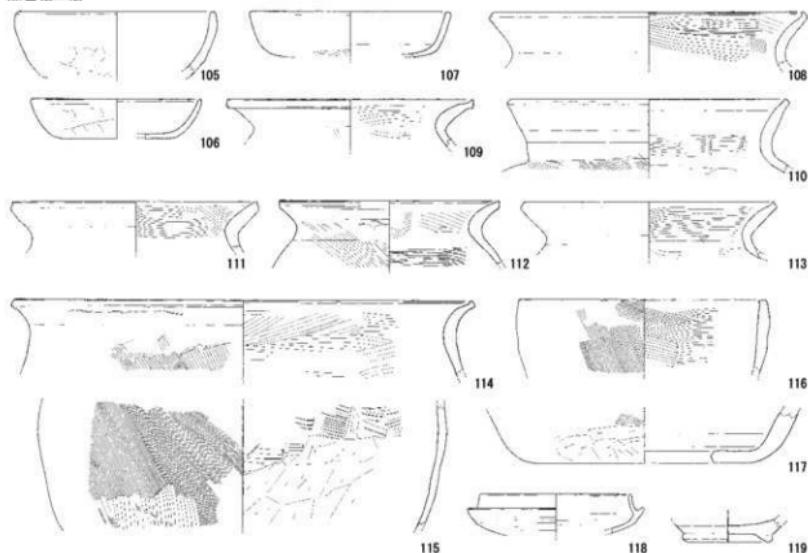


第9図 捣口遺跡 SD 1、SK 1 出土遺物実測図 (1:4)

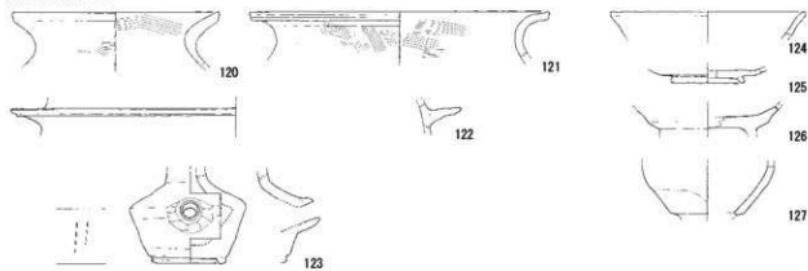


第10図 桶口遺跡黒色砂質土層出土遺物実測図 (1 : 4)

**黒色粘土層**



**黒褐色粘質土層**



**灰オリーブ粘質土層**



0 20cm

第11図 捅口遺跡各層位出土遺物実測図 (1 : 4)

ているが、遺構に伴ったものではないものの大形の破片が多い。また、3個体の土馬も注目される。

なお、71・75・91・98は確認調査坑からの出土である。75はNo.2確認調査坑出土であるが、この位置の層序が砾石下の黒色砂質土層のみであるため、この層からの出土としたものである。他の71・91・98はNo.3確認調査坑出土である。これらについては、ここで扱うものの黒褐色粘質土層出土の可能性を含むことを断つておく。

65～70は土師器の粗製椀である。口径に対し比較的高い器高をもつたため、全体的に半球状の形態を呈する。ただし、68・69は完形で並んだ状態で出土した状況から同時期のものと推測できるが、69は器高が低く杯に近い形態を呈しており、法量に関しては個体差が大きい。

71～74は杯、75は皿である。口縁部形態や器壁の様相は多様で時期差を生じ、特に75の皿は中世初頭まで降る。最も古相の71はヘラミガキとヘラケズリで調整し、内面に螺旋暗文を施す丁寧な仕上げであるが、器壁や色調は粗製椀にちかい。

76～79は高杯の脚部である。76・77は脚柱部をハケメ工具でヘラケズリ状に強く調整するが、ヘラケズリにより多面体を呈するほどのものではない。78・79も同様の範疇にある。

80は土師器の鉢、81～95は甕である。甕は口縁下端が肥厚する古相のもので、88・93等は頗著である。95は口縁部内面を板状工具により器壁が変化するほど強くヨコナデされており、口縁端部の形状を含め異質なものである。

96はロクロ土師器の椀、97～99は土馬、100・101は須恵器の杯と高杯、102は灰釉陶器の椀、103は施釉陶器の椀、104は土鍤である。土馬は3個体ともに尻尾が下がる。しかし形態の明確なものはなく、97は尻尾のみ、98と99は胴部から尻尾までの残存で、頭部や脚は欠損している。98・99ともに鞍を粘土紐で表現するが、98は実態にちかい表現であるのに対し、99は形骸的である。98は加えて尻繋を線刻で表現している。成形・調整は両者で大きく異なり、98の胴部は中実で、腹部を大きく抉るように削り取るのに対し、99は中空である。98は豪快なヘラケズリにより胴部等が多面体を呈するが、99は背にハケメ

を施す他はナデ等による滑らかな仕上げである。

#### (4) 黒色粘土層出土遺物

土師器の椀(105・106)、杯(107)、甕(108～115)、瓶(116・117)、須恵器杯(118)、山茶椀(119)がある。椀は粗製のものであるが、105は半球状の深い器高であるのに対し、106は低く杯にちかい形態である。甕は全体の形状が明確なものはなく、口縁部片が多い。口縁下部が肥厚するもので、特に112・113は頗著である。端部外面に面をもつが、112はハケメの工具で強くナデする。115は外面上半を細かいハケメ。下半を非常に浅く幅の広いハケメで工具を使い分けている。118は、受部直下に棒状工具による回線状の強いナデを施している。119は高台に砂痕があり、内面に炭が付着する。硯に転用されたものであろう。

#### (5) 黒褐色粘質土層出土遺物

土師器の甕(120・121)から、天目茶椀(127)まで多様な時期のものが混在し、小片が多い。土師器甕は、前述までのように口縁下部の肥厚が頗著なものはみられない。甕(123)は注口が突出し、高台をもつもので、新しい部類である。体部外面に鋭利な工具により「」が刻まれる。124は灰釉陶器としたが、山茶椀かも知れない。127の釉は茶色の強い発色であるが、体部下半は錯錆となり、天目茶椀とした。

#### (6) 灰オーブ粘質土層出土遺物

小片ではあるが近世の陶器等が確認できる層である。他に室町時代の土師器鍋の小片等もあるが、図示できたものは128・129の山茶椀である。

(倉野・森川)

#### 【註】

- ① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告 I 内院地区の調査』平成13年3月31日
- ・三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡(第2・3・4次発掘調査報告)』1995年3月 他多数。
- ② 三重県埋蔵文化財センター『研究紀要第12号 森脇遺跡』2002. 9

番号	器物名	構造	出土位置	器種	法 量 (cm)	目 標 高さ その他の 特徴	調整仕込の特徴	色 調	地 土	保存状 態	備 考
1	23-5	SII	96~96cm	上部部	14.2	—	内・外 内・外 内・ナジ	灰白(7, 9H7/3) 灰黄(2, 9H7/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含 2mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
2	22-5	SII	96~96cm	上部部 鉢	13.2	—	内・外 内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
3	23-1	SII	96~96cm	上部部	13.6	—	内・外 内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
4	23-3	SII	96~96cm	上部部	13.2	—	内・外 内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
5	22-4	SII	96~96cm	上部部	12.6	—	内・外 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
6	18-5	SII	96~96cm	上部部 鉢	13.4	—	内・外 内・ナジ 内・工具	灰白(7, 9H7/3)	種類	口縫隙1/12	口縫隙に附着。
7	20-7	SII	96~96cm	上部部	—	—	内・ナジ	灰白(2, 9H7/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	側面保存	
8	20-1	SII	96~96cm	上部部	9.6	—	体面 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	側面1/12	
9	20-6	SII	96~96cm	上部部	—	底面 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	底面保存		
10	18-4	SII	96~96cm	上部部 鉢	12.2	—	内・ナジ	灰白(2, 9H7/2)	種類	口縫隙1/12	
11	1-5	SII	96~96cm	上部部	11.4	—	体面 内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/1)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	体部外面に附着2.	
12	18-2	SII	96~96cm	上部部	14.4	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(2, 9H7/3)	種類	口縫隙1/12	
13	15-3	SII	96~96cm	上部部 鉢	15.6	—	体面 内・ナジ 内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
14	21-1	SII	96~96cm	上部部	31.4	—	内・工具	灰白(2, 9H7/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
15	15-2	SII	96~96cm	上部部	28.2	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
16	20-2	SII	96~96cm	上部部	25.2	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
17	15-1	SII	96~96cm	上部部	30.6	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
18	22-1	SII	96~96cm	上部部	25.8	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(2, 9H7/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
19	20-4	SII	96~96cm	上部部	17.8	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
20	18-7	SII	96~96cm	上部部	21.6	—	体面 内・ナジ 内・ナジ	灰白(2, 9H7/3)	種類	体部1/12	
21	21-3	SII	96~96cm	上部部 鉢	21.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
22	20-3	SII	96~96cm	上部部	18.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
23	20-5	SII	96~96cm	上部部	16.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/4)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
24	18-3	SII	96~96cm	上部部 鉢	15.0	—	内・ナジ	浅黄(2, 9H7/4)	5~6mm <sup>2</sup> 小石含	口縫隙1/12	
25	16-2	SII	96~96cm	上部部	14.5	—	内・ナジ 内・ナジ	浅黄(2, 9H7/4)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
26	16-1	SII	96~96cm	上部部	19.6	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/4)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙2/12	
27	18-6	SII	96~96cm	上部部	—	—	内・ナジ 内・ナジ	褐(7, 9H8/6)	種類	子縫隙1/12	底部外面に附着。
28	18-1	SII	96~96cm	上部部	19.8	—	内・ナジ	灰白(10H8/4)	種類	口縫隙1/12	
29	19-1	SII	96~96cm	上部部 鉢	—	—	体面 内・ナジ	褐(10H8/1)	種類	体部1/12	
30	19-2	SII	96~96cm	上部部	—	—	体面 内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/4)	種類	体部1/12	
31	19-3	SII	96~96cm	上部部	—	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	底面保存		
32	21-2	SII	96~96cm	上部部 鉢	23.9	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
33	17-2	SII	96~96cm	上部部	—	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/4)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	体部1/12	
34	23-1	SII	96~96cm	上部部	19.0	—	内・ナジ 内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/4)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
35	19-4	SII	96~96cm	上部部	19.4	—	内・ナジ 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
36	16-3	SII	96~96cm	上部部	22.8	—	内・ナジ	灰白(10H8/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
37	23-2	SII	96~96cm	上部部	—	—	底面 内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	底面1/12	
38	22-2	SII	96~96cm	上部部	23.0	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/4)	2mm <sup>2</sup> 砂粒若干含	口縫隙1/12	口縫隙外面に黒斑。
39	17-1	SII	96~96cm	上部部	23.4	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
40	22-3	SII	96~96cm	上部部	—	底面 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12		
41	22-6	SII	96~96cm	上部部	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	口縫隙に埋込み。	
42	23-7	SII	96~96cm	前部部	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	1/12		
43	18-1	SII	96~96cm	前部部	14.6	3.7	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/2)	2mm <sup>2</sup> 砂粒含	1/12	
44	23-6	SII	96~96cm	前部部	12.6	6.5	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	受皿1/12	
45	25-5	SII	93~108cm	上部部	10.8	—	内・ナジ 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
46	24-1	SII	93~108cm	上部部	17.4	—	内・ナジ 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
47	26-3	SII	93~108cm	上部部 鉢	13.4	3.0	内・ナジ 内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	種類	口縫隙1/12	折れ・螺旋彫文。
48	21-5	SII	93~108cm	上部部	13.8	—	内・ナジ 内・ナジ 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	外側に切妻削。
49	26-2	SII	93~108cm	上部部	18.6	—	内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	種類	口縫隙1/12	
50	26-1	SII	93~108cm	上部部	15.0	1.7	内・ナジ 内・ナジ	褐(7, 9H7/4)	種類	口縫隙1/12	
51	26-1	SII	93~108cm	上部部	20.4	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(7, 9H7/4)	種類	口縫隙1/12	内側に折れ+螺旋彫文。
52	25-6	SII	93~108cm	上部部	—	底面 内・ナジ 内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12		
53	23-2	SII	93~108cm	上部部	11.6	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
54	25-4	SII	93~108cm	上部部	12.5	—	内・ナジ	浅黄(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
55	24-3	SII	93~108cm	上部部	15.8	—	内・ナジ	灰白(7, 9H7/3)	種類	口縫隙1/12 13F	
56	25-1	SII	93~108cm	上部部	17.4	—	内・ナジ	灰白(10H8/2)	種類	口縫隙1/12 13F	
57	23-4	SII	93~108cm	上部部	16.4	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12	
58	24-1	SII	93~108cm	上部部	31.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	種類	口縫隙1/12 13F	
59	24-2	SII	93~108cm	上部部	26.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
60	25-2	SII	93~108cm	上部部	21.0	—	内・ナジ	灰白(10H8/3)	種類	口縫隙1/12	
61	25-7	SII	93~108cm	上部部	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(10H8/2)	種類	小片		
62	26-5	SII	93~108cm	前部部	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(6/7)	種類	天井部1/12		
63	26-6	SII	93~108cm	前部部	—	体面 内・ナジ 内・ナジ	灰白(6/7)	種類	体部1/12	沈泥2組2条+別穴頭日。	
64	26-7	SII	93~108cm	前部部	—	ナジ	灰白(12/13)	種類	小片		
65	13-6	—	93~108cm 前部部 鉢	—	内・ナジ 内・ナジ	灰白(2, 9H7/2)	1mm <sup>2</sup> 砂粒含	口縫隙1/12			

第1表 橫口遺跡出土遺物観察表①

番号	器物名	量	出土位置	目	法 目	量 (cm)	調整仕込の状態	色 調	地土	保存度	備考
66	12-6	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	9.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
67	12-5	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	11.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
68	13-5	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	11.8	4.3	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
69	13-4	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	11.9	3.6	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
70	5-4	—	118.7~125.1cm 黑色の土層	土師器	13.5	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
71	3-6	—	118.7~125.1cm 黒褐色の土層	土師器	15.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
72	13-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.0	3.2	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
73	13-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	14.2	2.8	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
74	12-7	—	黑色の土層	土師器	13.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
75	4-2	—	125.1~130.1cm 黑色の土層	土師器	10.8	1.7	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
76	1-4	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.5	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
77	1-5	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	11.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
78	9-4	—	118.7~125.1cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
79	8-4	—	118.7~125.1cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
80	10-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	17.6	8.5	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
81	8-1	—	黑色の土層	土師器	28.9	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
82	10-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	15.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
83	12-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
84	9-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	19.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
85	12-4	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	21.4	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
86	9-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	15.8	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
87	12-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	23.6	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
88	1-2	—	黑色の土層	土師器	18.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
89	13-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
90	9-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	20.4	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
91	3-4	—	118.7~125.1cm 黒褐色の土層	土師器	18.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
92	12-4	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.2	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
93	9-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	19.6	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
94	8-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
95	10-1	—	118.7~125.1cm 黑色の土層	土師器	18.4	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
96	7-2	—	118.7~125.1cm 土器群	土器群	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
97	11-2	—	118.7~125.1cm 黒褐色の土層	土師器	12.0	3.9	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
98	2-3	—	118.7~125.1cm 黒褐色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
99	11-1	—	黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
100	2-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	12.0	3.9	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
101	14-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
102	7-6	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
103	14-3	—	118.7~125.1cm 黒褐色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
104	14-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	1.4	6.2	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
105	7-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
106	5-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	14.0	3.3	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
107	7-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	16.2	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
108	6-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	25.2	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
109	3-3	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	20.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
110	1-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	22.5	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
111	8-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	20.0	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
112	7-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	17.6	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
113	6-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	20.3	16.7	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
114	8-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	27.4	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
115	9-2	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	—	33.0	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
116	4-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	20.2	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
117	6-4	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
118	7-1	—	95~100cm 黑色の土層	土師器	12.2	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
119	7-5	—	山羊骨	山羊骨	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
120	3-5	—	山羊骨	山羊骨	16.6	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
121	3-2	—	山羊骨	山羊骨	24.4	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
122	3-1	—	山羊骨	山羊骨	—	27.0	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
123	2-1	—	山羊骨	山羊骨	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
124	4-7	—	山羊骨	山羊骨	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
125	4-1	—	山羊骨	山羊骨	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
126	4-6	—	山羊骨	山羊骨	—	—	内・外 内・ナダ	灰白 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
127	4-3	—	天竺葵	天竺葵	—	—	内・外 内・ナダ	高台 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
128	4-8	—	山羊骨	山羊骨	12.0	—	内・外 内・ナダ	高台 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合
129	4-5	—	山羊骨	山羊骨	—	5.2	内・外 内・ナダ	高台 内・ナダ	ぬい ぬい	1.ぬい	口縫合

第2表 横口遺跡出土遺物観察表②

## IV. 西村遺跡

### 1. 調査概要

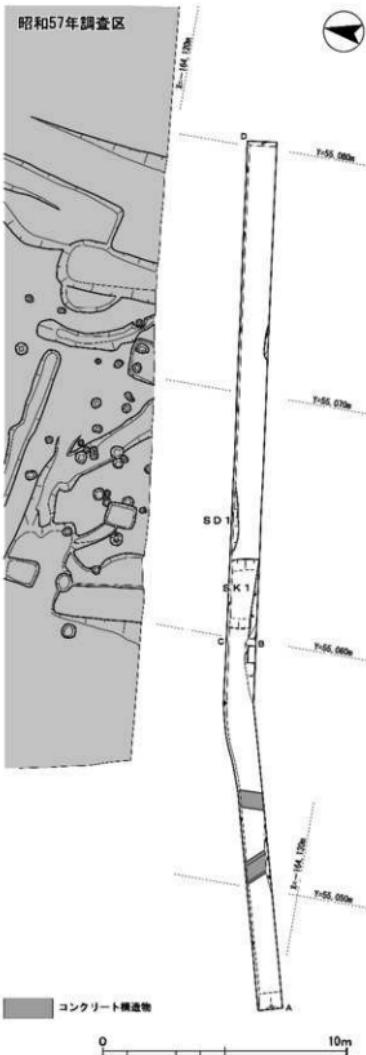
西村遺跡の調査は、幅約1m、延長35.5mの範囲で行った。樋口遺跡と同様、地域の生活道路上であるため、一日の調査箇所はその日のうちに埋め戻す調査方法で実施せざるを得なかった。そのため、十分に確認ができなかった部分もあったことに加え、調査区の半分程度に擾乱による検出面の消失があった。こうした状況ではあったが、土坑や溝を確認し、若干の遺物が出土している。

### 2. 基本層序

調査区は標高21mの丘陵裾に位置する。調査区15m付近までは、消火栓埋設が理由とみられる擾乱が



第12図 西村遺跡調査区位置図 (1 : 2,000)



第13図 西村遺跡調査区平面図 (1 : 200)

地表下1m以下にまで及んでいる。それ以東では、アスファルトや道路造成に伴う砕石等の下に無遺物の明赤褐色シルト～粘土層が分布する。地表から粘土層までは50～90cmで、東部ほど浅くなる。検出した遺構はこの層を切り込んでいた。

### 3. 遺構

#### (1) SK 1

15m付近で検出した。径2.8mの円形を呈するもので、深さは検出面から1mまで確認したが、底部には到達していない。埋土は上下2層に分かれ、上層は固く締まった厚さ25cmの黒色粘質土、下層は黒褐色粘土である。遺物が出土しておらず、埋土上面は現代の客土であるため、時期は特定できない。土坑としたが、調査区が狭小のため溝の可能性もある。その場合、北側へ延長すると昭和57年度調査で検出されている溝状遺構<sup>③</sup>の延長となる可能性が生じる。

#### (2) SD 1

18～22mで調査区端に並行して検出した遺構である。検出面と色調が酷似しており、重機での掘削をかなり進めてからの検出であった。調査区端で一部の検出に止まるため、大型の土坑等の可能性もある。埋土は暗褐色粘質土で、土師器鍋や皿の小片を確認した。これらから室町時代の時期が与えられる。

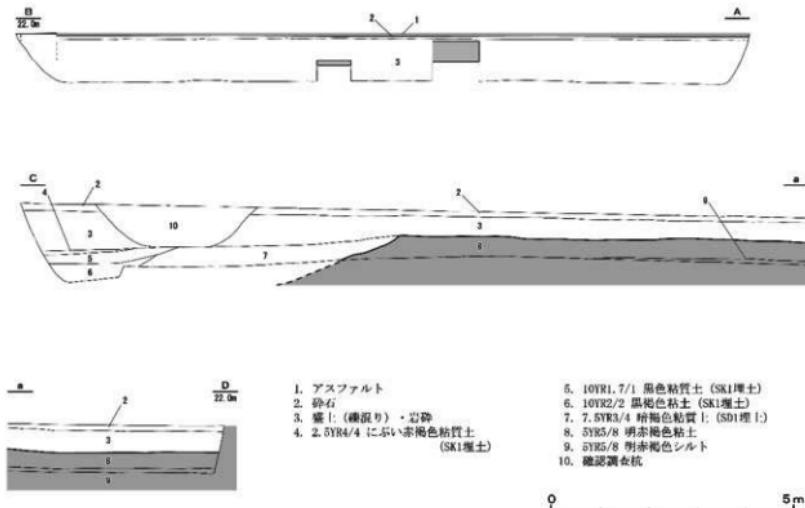
### 4. 遺物

遺物の出土は、SD 1からのみで、土師器皿や鍋の小片が数点である。器壁等の特徴から室町時代のものと考えられるが、図示できるものはない。

(倉野・森川)

#### 【註】

- ① 三重県教育委員会『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋文化財発掘調査報告』1983.3



第14図 西村遺跡調査区土層断面図 (1:100)

## V. 結語

今回の調査は両遺跡とも幅約1mの狭小な溝状の調査区である。このため遺跡の詳細を十分に把握するには至っていない。また、生活道路上であるため、既述したように当日の調査範囲は即日埋め戻しを余儀なくされ、調査区全体を視野に入れた検討ができない状況であった。このため、日々の調査記録や考察に一貫性を欠く危険を孕んでいた。こうした状況下での調査ではあったが、遺跡の性格を垣間見るいくつかの成果を得ることができた。

### 1. 横口遺跡

#### (1) 層位と時期

前述したような劣悪な状況ではあったが、層位別の遺物の取り上げに努めた。それを基にした各層の状況は既述したとおりである。灰オリーブ粘質土層(3)には近世遺物を含むが、それより下位には含まれず、この層と下位で大きく2層に分かれる堆積であることが分かった。概ね現道下0.8~1.2mまでは、近世以降の作用が入る。その下の層では主に4層に分けて調査を行ったものの、各層に中世の遺物を含むことが判明した。黒色砂質土層(16)の施釉陶器(103)、黒褐色粘質土層(6)の天目茶碗(127)等により、室町時代以降の作用となる。それより下位の黒色粘土層(7)でも山茶碗(119)が出土しており、下層全体として中世以降の作用とせざるを得ない結果となった。ここで問題となるのは、黒色砂質土層(16)から土師器の粗製椀(68・69)が完形で並んで出土したことである。室町時代以降の作用が入る層での出土状況とするには疑問である。

この層から出土する土師器の粗製椀は、比較的深い半球状にちかい形態を呈する。これらは、斎宮跡で杯Gと称している<sup>5</sup>ものでI-1期、69はやや器高が低くI-2期に並行するものである。69はやや時期が下ることになるが、並んで完形で出土した結果から同時期とするのが妥当である。粗製のため、この程度の個体差は認めて差し支えないが、最も降ってもI-2期初頭の7世紀末頃と考えられる。

杯では、71が同様な時期であるが、II-1~III-

2までの多様な時期が混在する。比較的大型の破片で圧倒的多数が出土している土師器甕においては、口縁端部外面に銳利な面をもち、口縁下部の肥厚が顕著であるものが圧倒的である。この様な特徴は概ね7世紀のものとされ<sup>6</sup>、粗製椀の状況と合わせ、この層の出土遺物の主体は7世紀後半~末頃にあるものと考えられる。このことから、黒色砂質土層としたものに7世紀後半の層が内在する可能性が高い。そしてこの中に後述する土馬も含まれるのである。

同様な状況は黒色粘土層やSD1でもみられ、SD1は黒色粘土層を切り込む。SD1の時期を鎌倉時代以降と既述したが、黒色粘土層を含め7世紀後半とすることに大きな抵抗はないものと考えられる。

SK1の杯皿類は、前述のものに比べ器高が低くI-2~I-3期、甕の口縁部の肥厚も曖昧なものが多くなり、SD1よりは時期的にやや下り、8世紀のものが主体である。このことは、SD1より上層の黒褐色粘質土層(6)を切り込むことと矛盾はない。黒褐色粘質土層の時期からSK1の時期を中世以降と既述した。その場合、SD1やSK1の遺物の主体は混入となり、混入遺物が層位的に矛盾の無い状況を呈すこととなる。やはり何らかの誤錯が生じている可能性が捨てきれない。SK1の時期が8世紀に遡る可能性を示唆しておきたい。

このように、各所で何らかの誤錯が生じている可能性があるのは、既述した調査環境による調査精度の限界を示すものであろう。

#### (2) 土馬

今回の調査で尾部や脚の小片を含め4体の土馬が出土している。その内、98と99は頭部や脚を欠損しているもののある程度状況の分かるものである。既述したように、両者は成形・調整が大きく異なる。小笠原分類<sup>7</sup>によれば、両者とも第I段階であるが、鞍を粘土、尻糞を線刻で表現している98はB形式、形骸化した鞍のみを粘土で表現する99はC形式となる。時期的には98は藤原宮造営年代の7世紀後半、99はやや降って8世紀初頭と/orすることができ、両者とも飛鳥時代に収まる。出土位置も黒色砂質土層

(16) であり、前述した状況と全く矛盾はない。

中実で豪快なヘラケズリで成形・調整を行う98と中空でナデやハケメで行う99とは、99が時期的にやや下るとしても技法の差が大き過ぎるように考えられる。中実と中空の差は時期ではなく製作集団差とする指摘<sup>5</sup>もあり、当遺跡においても、異なる製作母体を考え良いのではないだろうか。

県内の出土の土馬を集成した山中由紀子は、出土状況が不明確なものが多い中で、出土位置が明確なものは旧河道や溝等が大半で、一般集落との識別は困難なもののが施設の様相を示す遺跡がほとんどとしている<sup>6</sup>。今回の調査結果では公的施設の要素は認められないものの、土馬の出土位置は湿地帯の様相を示す地層であり、現状でも湧水が激しい。2体の土馬は98~120mの近接した地点で出土している。102m地点からは、安定した黄褐色系の粘土層が隆起を始めており、湿地帯の北岸付近からの出土とすることが出来る。したがって、木辺の祭祀の環境には十分である。

さて、前述した正立状態で並んで出土した土師器碗(68・69)もこの付近からの出土である。土馬のみの使用で祭祀が完結するとは考え難く、非常に根拠に乏しいものの土馬祭祀に伴う供物の容器することは出来ないであろうか。残念ながら県内の出土例からはその様な報告はないが、蓮岡法暉は島根県の出土例に土馬と手捏土器、土玉のセットが3例あることを報告している<sup>7</sup>。当遺跡の土師器碗も粗製であり、手捏土器に通じるものがあることも興味深い。県内でも杉垣内遺跡では旧河道からぎっしり詰まった様な状況で多量の土器類と伴に土馬や手捏土器、畜車等の祭祀遺物が出土している<sup>8</sup>。当遺跡の土師器碗もこれらの手捏土器に相当し、土馬に伴う可能性を無視できない。

その他、この層からは多量の上師器長胴甕片が出土している。山川均は美濃庄遺跡の川跡から土馬等の祭祀遺物とともに多量に出土した上器について、祭祀に伴い意識的に投棄されたものが含まれる<sup>9</sup>としている。前述した土師器碗が祭祀に伴うものであれば、これらの甕片は祭祀場への投棄であり、單なる投棄と済ませられない状況も生じる。杉垣内遺跡でも多量の土師器甕片を作っており、土師器甕も祭

祀の一翼を担っていた可能性がある。

しかし、土馬に関わる祭祀の詳細な仕様について現時点では解明されていない。当遺跡の調査結果からも積極的な土馬と土師器碗・甕の共伴に言及するには躊躇する。ここでは、その可能性を示すに止めざるを得ない。

次に、祭祀の目的であるが、樋口遺跡の立地から2つの候補が考えられる。遺跡背後の玉城丘陵には群集墳が密集する。時代が下って奈良時代になっても貴人が葬られ<sup>10</sup>、葬送の地として意識され続けていた。樋口遺跡は、丁度その入り口にあたるため、葬送の地への出入りに際する祭祀が行われていた可能性がある。しかし、貴人の墓を対象とした祭祀について、複数の製作集団による土馬が混在することに違和感がある。貴人であれば、その権力により祭祀も土馬も統制されたものにならてもよい。

もうひとつは、祈雨祭祀である。樋口遺跡の近隣には斎宮池があり、現在ではそれを水源とする宮川用水が広大な明野台地を潤している。調査区も土馬出土付近で湧水が激しく、水源地の状況を呈している。ここを起点にした用水が、当時も眼前に広がっていたであろう水田を潤していたことは明白である。祈雨祭祀について小笠原好彦は「村全体の利害にかかるため共同祈願の形式をもってなされる点に特徴がある<sup>11</sup>」としている。複数の製作母体からなる土馬は、ここを水源とする各集落が集合したことを見ると推測され、その可能性は大きいものと考えられる。

この様に、7世紀後半の樋口遺跡では、各集落が共同で祈雨祭祀が行われていた。その祭祀の仕様は土馬と碗類と長胴甕類を用いたものであったことを調査結果は示しているように思えるのである。

## 2. 西村遺跡

調査区の半分ちかくに搅乱が及ぶこともあり、土坑と溝の各1基を検出したに止まった。その内、S D 1は室町時代の時期を確認している。

当調査区の北側では、既述したように昭和57年に発掘調査が実施されており、鎌倉時代から室町時代の集落跡が検出されている<sup>12</sup>。当然のことながら今回の調査で、それとの連動が期待されたのであるが、

前回の調査に直接運動する事項は確認できなかった。唯一同時期のSD1が、掘立柱建物や土坑等で構成される集落跡の一つの要素になるものと考えられる。

今回の調査区は玉城丘陵の北端部で、東西の開析された谷により北へ延びる尾根状を呈する地形の北端部である。この尾根は、北へ向かうにつれて標高を減じるが、傾斜は非常に緩やかで、宅地や畠として利用されている。昭和57年の調査区は既に消滅しているが、この尾根の先端部に位置する。それから南側へ尾根上に集落跡が延びていることが想定され、民家の改築現場で遺物包含層が確認されている<sup>⑨</sup>。今回の調査でそれが確認できなかったのは、検出面直上まで道路造成による碎石等が及んでいることから、既に削平されているためと考えられる。

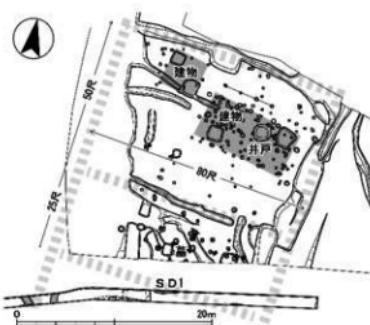
上記の状況を踏まえ、集落跡の様相を想定してみたい。昭和57年の調査では、井戸を内包する掘立柱建物を含め2棟の建物、塀、土坑で構成される集落の形態を示している。報告が概略であるため詳細は不明確であるが、この集落の時期は廃棄土坑から出土した土器器鉢により室町時代と考えられる。これらの周囲は小規模な構が巡っているが、西側は落ち込みとなっており、削平されている可能性がある。南北の両溝間が溝の内側で15mを測り、約50ft。東西は不明とせざるを得ないが、24mの80尺と想定した。溝の時期は明らかにされていないものの、300m<sup>2</sup>の区画された屋敷地が想定できる。この区画の南側には刀子が出土した中世墓と思われる土坑がある。今回検出したSD1は既述したように同時期の室町時代であり、区画溝に想定すれば、墓を含む区画が完成する。その規模は南北7.5mで、前述の区画の丁度半分の25尺である。既述したように、集落がさらに南へ続く可能性が高く、墓がさらに南側に想定される区画内の建物に付属する可能性もある。いずれにしても、建物を含む主区画と墓を含む副区画からなる集落構成である可能性が出てきたのである。

最後に、昭和57年の調査区は座標による位置が示されていない。今回の調査区との位置関係は当時及び現在の事業計画図面等を照合した図上での決定である。数値的な内容については、非常に曖昧なものであることを断っておく。

(森川)

#### 【註】

- ① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月
- ② 上村安生「土師器（6～8世紀）編年概観」『三重県史 資料編 考古2』三重県 平成20年3月31日
- ③ 小笠原好彦「土馬考」『物質文化25』物質文化研究会 1975年7月
- ④ 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘資料選Ⅱ』平成22年3月 26日
- ⑤ 山中由紀子「土馬」『三重県史 資料編 考古2』三重県 平成20年3月31日
- ⑥ 蓼岡法暉ほか『家の上遺跡・石塚遺跡』建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所 本原郡木次町教育委員会 1998年3月
- ⑦ 河瀬信幸ほか「杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1989.3
- ⑧ 山川均ほか『美濃庄遺跡四反田地区発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会 1988.3
- ⑨ 小山憲一「長谷町遺跡」『長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2010
- ⑩ 前掲③と同じ
- ⑪ 高見宜雄「西村遺跡・愛場遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983.3
- ⑫ 前掲⑩と同じ



第15図 西村遺跡屋敷地区画想定図 (1:500)

樋口遺跡

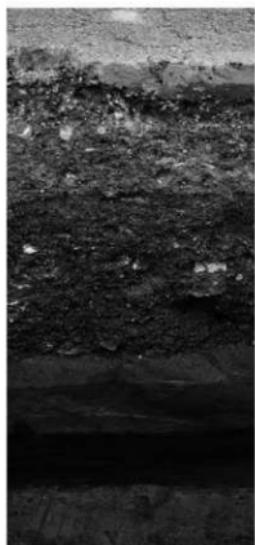
写真図版 1



調査前風景（南から）



0~10.7m（南から）



0~10.7m層序（東から）

写真図版 2

樋口遺跡



10~25m (北から)



25~36m (南から)



36~49m (南から)



49~62.5m (北から)

樋口遺跡

写真図版 3



62~70m (北から)



62~70m層序 (東から)



70~86m (北から)



86~96m (北から)

写真図版 4

樋口遺跡



93~109m (南から)



109~119.7m (南から)



93~109m土師器検出状況



SD 2検出状況 (南から)

樋口遺跡

写真図版 5



119. 7~128. 5m (北から)



128. 5~147. 5m (南から)



147. 5~160m (南から)

写真図版 6

樋口遺跡



土師器



63



123



99



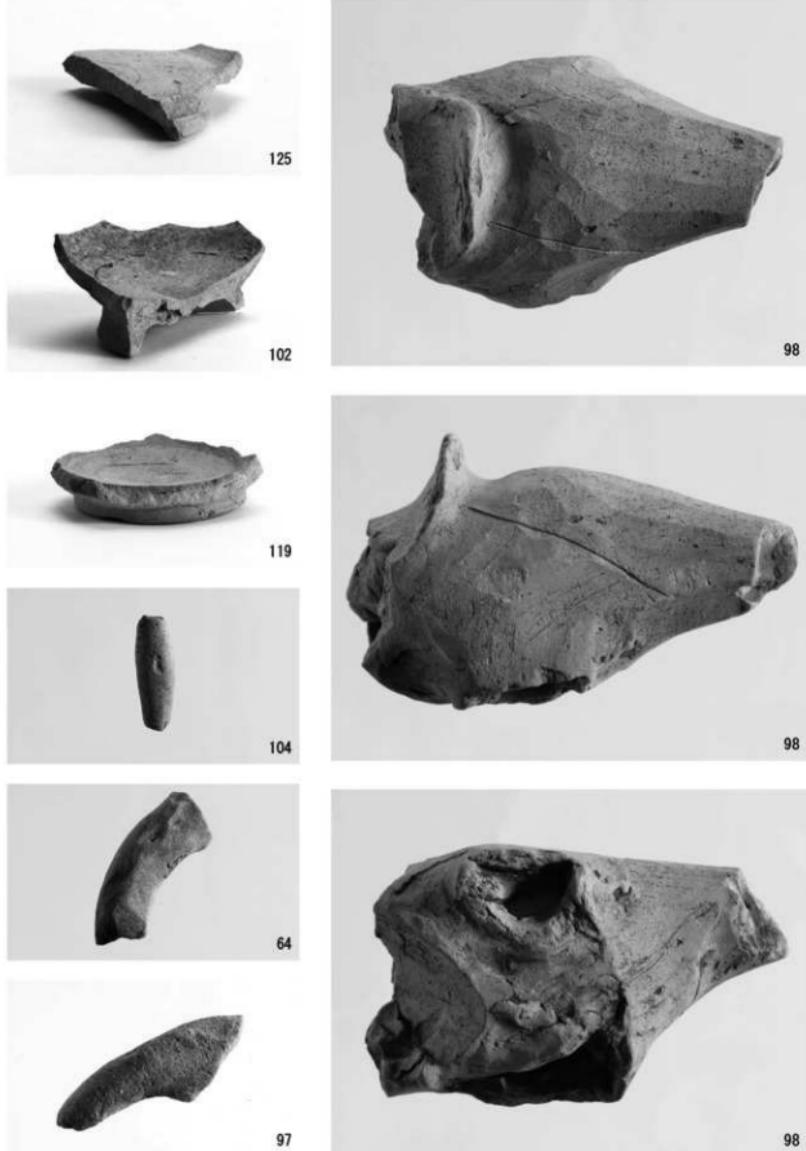
99



99

写真図版 8

樋口遺跡



灰陶器・山茶碗・土鍤・土馬



調査前風景（上空から）



調査前風景（西から）

写真図版10

西村遺跡



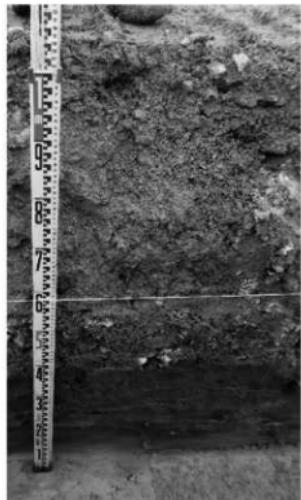
0~15.5m (西から)



14.85~25m (東から)



25~35.5m (西から)



21m層序 (南から)

## 報告書抄録

---

三重県埋蔵文化財調査報告 394

樋口遺跡・西村遺跡（第2次）  
発掘調査報告

2020(令和2)年10月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 共立印刷株式会社

---





